

33 きよの住む部屋 1

星野博美

「三人、同じに育てたつもりなんだけどね……」

母の口癖である。娘たちが中年になっても、そう言い続ける。

この「……」は時と場合によって変容する。

長女について言及する場合は「なげこれほどお人好しなんだ」が続く。次女の場合は「なんでこんなに儉約家なんだ」となる。そして三女——私だが——の場合はこうだ。

「なんで一人だけ、ちよつと『へん』なのか」

自分だけ何か波長がズレている、という感覚は、小さい頃から漠然と持っていた。

その「へん」は、注意深く観察しなければ気づかないような程度なので、学校や友達関係のなかではあまり支障が出ない。四六時中見ている母親だからこそ気づく程度の、微妙な「へん」。お年寄りが好きだとか、死後の世界に興味があるとか、見えない力を異様に怖がるとか、そんな類い。家族で一緒に同じ曲を奏でているのに、一人だけ半音下がっているような感じ、と言えば近いだろうか。

二人の姉と私を隔てたものは何かあるのだろうか。

祖母の存在が大きかったのかもしれない。

ようやく最近、そう思うようになった。

同居していた父方の祖母、きよに、私はかわいがられた。

そうじゃあしゃあと書くが、それを認識したのは、実はごく最近のことである。何かの拍子に長姉から「おばあちゃんは、あんたばかりかわいがってた」と軽く非難されたのだ。

当時を思い起こせば、多少はかわいがられたような気もする。しかしそれを比較すること自体、子どもには無理な話だ。自分から見た世界しか知らなかったのだから。

確かに私は、祖母と二人で行動することが多かった。祖母はまるで仔犬を散歩させるように、私をほうぼうへ連れ回した。

昭和四十年代、下町に暮らすおばあさんが年端のいかない孫娘を連れて気軽に出かけるところなど、たかが知れている。神社や寺の縁日、友達（つまり老人）の家、そして商店街だ。老人会の温泉旅行まで一緒に連れて行かれた。

他人ひと様の家に行っておもしろかったのは、座布団をめぐる攻防だった。遠慮屋の祖母は、座布団を出されても頑として拒否し、畳の上に座る。祖母を真似て、私も畳の上に座る。すると先方は困り果ててこう言うのだった。

「お願いだから座布団に座っておくれよ。あんたが座らないから、孫まで座らないじゃないか！」

そこまで言われたら、祖母も観念して座布団を受け取るしかないが、

それでも最後まで抵抗はやめない。尻の半分だけ座布団の端にのせるのだ。私も真似て半ケツで座る。私はいまでも、座布団の端に座るのが好きである。

「おばあちゃんにどこかへ連れて行ってもらった記憶は全然ない！」と長姉が息巻くところを見ると、客観的には「溺愛」と命名したくなるような行為に見えたのだろう。

それが仮に「溺愛」だとしても、いま考えれば、そこにはもう一つの理由があったような気がする。

うちは居住空間と職業空間が隣接した町工場だった。しかも工員さんたちの三度の食事を母が一手に引き受けていたため、父も母も目の回るような忙しさだった。チビッ子は祖父母の部屋においておくのが最も安

全かつ無難だったが、そこで問題になるのが、下の二人、つまり次姉と私、が年子だったことだ。

年の近い子どもは、ほとんど仔猫や仔犬だ。上の子が下の子にちよつかいを出し、とった、とられた、ぶった、ぶたれた、ずるい、ぐず、また泣いちゃった、言いつけてやる、等々、キヤアキヤアキイキイミイミイクークー、うるさいことこのうえない。最初はふざけているつもりでも、身体能力も知能も上の子に始終やられ続けると、下の子は逃げ場がなくなってしまう。逃げようとすれば追いかけられ、とっくみあいになる。

そこで両親は対処法を考えついた。仔猫引き離し作戦である。上の二人だけを連れ出し、私を家に残すことを両親はよくやった。仔猫は引き離せば、借りてきた猫のようにおとなしくなる。そこにはさらに、次姉

を一時だけ末っ子にしてやり、思う存分甘えさせるといふ配慮もあつたに違いない。

長姉が「あんたはおばあちゃんに溺愛された」と非難するなら、私も言わせてもらおう。大阪万博のアメリカ館や東京タワーに、私だけ連れて行ってもらえなかったことをお忘れか？　そこに末っ子だけいないことに、気づいていたか？

おそらく祖母は、置き去りにされがちな末っ子を憐み、自らすすんで連れ回すようになったのだらうと思う。その文脈が抜け落ち、祖母に連れ回される私の映像だけが姉に記憶されているのだとしたら、ちよつぴり不当である。

祖母という時、姉のちよっかいから解放された私はおおむね上機嫌だった。そして祖母と一緒に地下鉄に乗る。行き先は泉岳寺だ。

春の縁日や夏、そして討ち入りの十二月十四日、私たちは泉岳寺に行った。

泉岳寺は、うちのある戸越駅から都営浅草線で三つ目にある。老女と幼女の足でも三十分もあれば着いてしまう。外出気分は満喫できながら、さほど家から遠くないという、絶妙な距離だ。

近かったという理由もあるが、少なくとも忠臣蔵が好きでなければ、泉岳寺には通わないだろう。いまの私から見れば祖母は、忠臣蔵の物語が内包する忠義や忠心、因果応報といった価値観を好む種類の人だった。泉岳寺駅から地上に出て寺へ行くまでに、まず私たちはある通過儀礼

を受けなければならなかった。道にずらりと立ち並んだ、傷痍軍人の列である。

白い服を身にまとった直立不動のおじさんたちの足元には、感情のこもった字がびっしり書かれた布が広げられていた。布の上に座っているおじさんに近づいてみると、足や腕がない。ギョツとして体をこわばらせると、「戦争でケガした兵隊さんたちよ」と祖母が耳元で囁き、早く歩くよう促される。

そこに集った傷痍軍人は、戦争で生き残った人たちであり、命を落とした人たちはそこにはいない。失われた命は、通常は見えないのだ。

戦争とは、足や腕を失うこと。

そんな、間違いではないが、極めて断片的なビジュアルイメージが、

幼い脳裏にインプットされた。

傷痍軍人の列を抜け、ようやく泉岳寺の境内に入る。

当時の頭で忠臣蔵の物語を理解していたとは思えないが、四十七人のサムライが雪の日にキラという人の家に押し入って復讐をとげ、切腹して死んだ、ということだけは、祖母の話からわかった。

忘れられないのは「首洗いの井戸」だ。キラの首を洗ったといわれる井戸。ただの首ではなく、切られたあとの、ゴロンとした首だ。当時は井戸は網で覆われておらず、自由に覗きこむことができた。身を乗り出して底を覗きこんでいると、体から切り離された首が、いまにも飛び出してきそうに思えた。何か危険を察知した祖母が「あぶない！」と言って私にしがみつき、その反動で逆に落ちそうになった。

その後調べて知ったのだが、昭和四十年代、傷痍軍人は上野や新宿、渋谷といった繁華街に姿を現すことが多かったという。しかしそれらの場所は祖母きよの行動範囲ではなかった。私は長いこと、傷痍軍人は泉岳寺にしかいなかったのだと信じていた。

失われた腕。吹き飛ばされた足。洗われるゴロンとした首。

忠臣蔵と傷痍軍人をセットで記憶する私にとって、泉岳寺のイメージは昔もいまも、「切り離された体の一部」なのだ。

溺愛の代償としては、いささか強烈だった。

そしていよいよ、祖母の部屋で暮らす日がやって来たのだ。

(つづく)